

■ 当面、ドル/円は基本押し目買いのスタンスで臨みたい

ウクライナ情勢の緊迫した状態が続き、米株価の下げに歯止めがかからない。NYダウ平均は昨日までの4営業日で計1600ドル超の下げに見舞われており、先行きの不透明感は強まるばかりである。

やはり、ロシアがウクライナ東部の親ロシア派支配地域の独立を承認し、ロシア軍の派兵を決めたことに対して、米・欧・日が経済制裁の発動を打ち出したことが大きい。

ただ、米株価が大幅安で反応している割に、外国為替市場のムードは比較的落ち着いている。今のところ欧米諸国による制裁は限定的で、なおも外交的解決の道を残している点を冷静に捉えているということなのであろう。ウクライナ東部で新ロシア派勢力が展開するあからさまな「偽旗作戦」を嘲笑するようなムードもあるように思われる。

さすがに、ユーロ/円は軟調な展開を余儀なくされているが、それでも一目均衡表の日足「雲」が下値サポートとして意識されている状況に変わりはない。

まして、ドル/円についてはウクライナ絡みの材料に対して同じ方向に動きやすい状況に置かれていることから、意外なほど確りとした値動きを続けている。ユーロ/円と同様、日足「雲」が下値サポートとして意識されているうえ、日足「雲」下限付近では89日移動平均線のサポートも利いている。基本は押し目買いスタンスで臨みたい。

前回更新分の本欄でも述べたように、いまだ21日移動平均線と89日移動平均線が上抜きで推移していることから考えれば「なおも強気継続」という感触に変わりはない。

もちろん、ロシアがいつでも本格的なウクライナ侵攻に踏み切れる状態にあることも事実であり、市場の警戒はそう簡単に和らぎそうもない。いまして、米NBCニュースから速報として伝わってきたのは「ロシアが(24日)夜明けまでにウクライナに侵攻すると確信」との発言がブリンケン米国務長官によってなされたというものであり、ますます緊迫化の度合いは強まってきている。

まずもって注目したいのは、やはりユーロ/ドルがどの程度まで下値余地を広げるかという点であろう。下図にも見られるとおり、足元は1.1280ドルの重要な節目をクリア



に下抜けるかどうかの一つの焦点であり、これを下抜けると1月28日安値=1.1120ドル処がどうしても意識されやすくなる。

仮に、ロシア軍によるウクライナ侵攻が現実のものとなり、ユーロ/ドルが急落した場合には、そこで一旦買い場を探る算段で臨みたい。ただし、そこで一定の戻りが見られた場合には、次

に改めて戻り売りのチャンスをうかがうことになると思う。

そもそもロシアと西側諸国との対立が一層激化することとなれば、それだけ欧州経済に及ぶ悪影響も拡大する。燃料や食品などの価格が大幅に上昇し、域内の個人消費は低迷するに違いない。結果、欧州中央銀行(ECB)がインフレ見通しを上方修正すれば、早めの引き締めが合意されると見る向きもあるようだが、果たして経済の成長ペースが大幅に鈍化するリスクを犯してまでECBは引き締めを急ごうとするのだろうか。

やはり、ECBは市場の期待ほどタカ派には傾斜できないと見る。

(02月24日 10:30)